

2016年6月3日 2022年5月9日改訂

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 15

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

南シナ海方面の船舶の障害物に関する記録で最も古い時代に属するものに、呉の時代に作られた万震『南州異物志』の下記の逸文がある。いずれも『太平御覧』に引かれたものである（〔内田 1977: 286, 287〕より再引用。きり方は改めた。）

句稚国去典遊<sup>ママ</sup>八百里。有江口、西南向。東北行極、大崎頭出張海中、浅而多磁石。（『太平御覧』巻 790）

漲海崎頭、水浅而多磁石。外徼人乘大舶。皆以鉄鑠鑠之。至此関、以磁石不得過。（『太平御覧』巻 988）

山田慶児によれば、この二文はもともと一連の記述であった〔山田 1996:157-158〕。山田は、6世紀後半に葛洪に仮託して作成された『太清金液神丹経』巻下（以下、『神丹経』下）が、『南州異物志』を換骨奪胎して道教的な地理的世界像を構築したと論じている（『神丹経』は、『道蔵』洞神部衆術類に収められている）。そのため、『神丹経』下は、明らかに『南州異物志』に新たな記述を加えているが、にもかかわらず、逸文よりも「一般に記述は詳しく、ときとして正確であるようにみえる」として、上記逸文に対応する箇所を挙げている。

句稚国去典遜八百里。有江日<sup>ママ</sup>、西南向。東北入、正東北行、大崎頭出張海中、水浅而多慈石。外徼人乘船舶、皆鉄葉。至此崎頭、関慈石不得過、皆止句稚貨易而還也。（『道蔵 18』北京：文物出版社；上海：上海書店；天津：天津古籍出版社, 1988,p759.）

確かにこちらのほうが、達意である。『南州異物志』の「典遊」は「典遜」の誤り、『神丹経』下の「江日」は「江口」の誤りであろう。「典遜」はマレー半島の北側に比定されるのが普通である〔饒 1982: 521-524, 527-528〕。「句稚」もマレー半島のクラ地峡のラノー側ではないかと考えている（後述）。メコンデルタ方面の扶南の范蔓が扶南大王を号して大船を作り「漲海」を越えて「屈都昆、九稚、典孫等十余国」を攻撃している（『梁書』巻 54、列伝 48、諸夷・海南諸国・扶南国）。「句稚」は「九稚」と同じである。「漲海」はこの文脈ではシャム湾ということになる。ただし、「漲海」はより広く南シナ海一帯を指したようであり、『梁書』扶南伝の別の箇所では、「又伝扶南東界即大漲海」と記し、ジャワ海方面の海を指している。

「崎頭」については、『読史方輿紀要』が江西の崎頭城について、「崎頭城、府東百里。孫愐

曰、「曲岸曰崎」。城在章江岸曲、因名。」と記している（顧祖禹撰・賀次君・施和金点校・2005. 『讀史方輿紀要 八 湖広・江西・浙江』北京：中華書局, p.4079）。孫愐は『唐韻』（8世紀）の作者であるが、この出典は後攷に俟つ。もし「崎」が湾曲した岸という意味であれば、「崎頭」は湾曲した河岸や海岸の地形で突端のある場所を連想させよう。これを踏まえて『南州異物志』中の「崎頭」についてあえて想像をたくましくすれば、これはインドシナ半島のカマウ岬あたりの指していると見ることはできないのではないかと。もちろん、低平なメコンデルタの海岸部は水浸しであり、地形の正確な把握は容易ではなかったろうが、扶南国の位置と大まかな広がりには理解されていたであろうから、カマウ岬あたりの屈曲について航海者は理解していたのではあるまいか。あるいは、19世紀初頭の水路誌に出てくるようなカマウー帯の陸標（Pulo Way – Pulo Oby – Pulo Condore [The Nautical Magazine 1840: 743 ;Huddart 1801: 460-463]）について正確な認識があったわけではなかろうが、沿岸の小島嶼列の湾曲について大体のイメージはあったのかもしれない。

「江口」は南西に向いている。この河口から東北へ川を遡っているようである。マレー半島で南西から東北に向かう川といえば、クラ地峡のクラ川であろう。上記の引用は、マレー半島のクラ地峡をラノー側からチュムポーン側に抜けると、シャム湾が広がり、その先にインドシナ半島—カマウ岬（扶南）があるという大局的な地理観を示したものではあるまいか。なお、この時期にマレー半島横断路が使われていたことは定説となっている[石澤・生田 1998: 75]。なお、饒宗頤は、「拘利口」と「句稚」「江口」を同じとする説を提示し、また、「拘利」の位置比定に Kemaman 河口の Chukai とする説とクラ地峡とする説の2説があり、いずれとも定めがたいとしている[饒 1982:528]。

「漲海」の「崎頭」あたりは水が浅く磁石が多いため、鉄板で被覆された外国の船が吸い寄せられて先に進めない、よって句稚国まで来て交易を行って帰ることが記されている。外国の鉄で被覆された舟がマレー半島以東に出てこない理由を説明するお話である。「江口」や「崎頭」の上記の地理比定が間違っていたとしても、この点だけはかなり確かであろう。

山田慶児が指摘するとおり、鉄を帯びた舟が磁石のある土地に引き寄せられて動けなくなるお話（磁石山伝説）は洋の東西に広がっており、この『南州異物志』の記述は、その代表的なものである。これに対応する話が、プトレマイオスの『地理学』第VII巻第2章「ガンジス河の外側のインドの位置」の最後に出てくる。「黄金半島」（マレー半島）の先の土地の記述である。

この他に伝えられるのは、連続した10島から成るマニオライ諸島というもの。ここでは、恐らくは島にヘラクレスの石（磁石）があるために、鉄釘を使った舟は動かなくなってしまうので、木釘で舟を作るという。[織田 1986: 123]

15世紀にヨーロッパで再発見されたというこの書が、2世紀の原型をどれほど残しているのか、私は知らないが、とりあえず2世紀の情報を伝えるものとして、『南州異物志』と比

較するとほぼ同時代の非常によく似た話であることは間違いない。鉄板が鉄釘になっている点と鉄釘の船と木釘の船の対比が見られることが違いとして指摘できる。

ヨーロッパの航海者は、古くから、インド洋、南シナ海方面の鉄釘を用いない船に関心を持っていたようであり、『エリュトラ海案内記』第 36 節には、「マダラテと呼ばれるこの土地独特の縫合小舟」に言及がある[薮 2016: 36, 283-285]。村川堅太郎は、鉄釘を造船に使用する人々が鉄釘を用いない船の存在を知り、磁石山伝説を作り出したと論じている[村川 1993: 208]。

磁石山伝説は、イスラームの航海者にも広まった。10 世紀の『インドの驚異譚』は「中国にある磁石山」というお話を載せている[家島 2011: 282-285]。ただし、この磁石山は海域ではなく中国内地の大河川のほとりにある。同時期の別のイスラームの知識人の著作『中国とインドの諸情報』も、地中海の装釘船とインド洋の無釘装の縫合船の対比に注目している。12 世紀のイドリースーは、紅河では磁気を帯びた山があるため装釘型船の使用は不可能であったと述べている[家島 2007: 41-44, 133]。

こうしてみると、『南州異物志』の「漲海」「崎頭」の記述は、無釘装の縫合船が一般的であったインド洋・南シナ海において地中海で一般的な装釘型の船が不在であった理由について説明した磁石山伝説を南シナ海のどこかで耳にして記録したものと考えるのが妥当ではなかろうか。

10 世紀以前の南シナ海が、中国ジャンクの闊歩する宋代以後の状況とは全く異なっていたことには注意が必要である。『漢書』地理志によれば、漢代の中国からインドへの交易ルートでは、「蛮夷の商船」が次々に転送を行っていた[石澤・生田 1988: 74]。時代はくだるが、750 年に日本に渡ろうとしていた鑑真一行は広州の様子について「川の中には、婆羅門（インド）・波斯（ペルシア）・崑崙（東南アジア）等の舶船が無数にあり」と記している。崑崙船については深見純生が詳細に検討している。崑崙船は大型の帆船であり、鉄釘を使わない縫合船であった。また、深見は、9 世紀末に広州で縫合船が建造されていることを示し、崑崙船の影響である可能性を指摘している[深見 2022a: 17-20]。また、唐代の東南アジア諸国の朝貢において林邑船が果たした役割についても指摘している[深見 2022b: 40-42]。まだ調査数は多くないが、水中考古学の沈船調査の結果を見ても、10 世紀以前の中国ジャンクは発見されておらず、その時期の Southeast Asian lashed-lug ship は 4 艘見つかっている。さらに 11 世紀以降についても中国的造船技術と東南アジアの伝統的造船技術を組み合わせたハイブリッド型の船の割合が小さくない[Flecker 2015: 38-42]。10 世紀以前の南シナ海では、ペルシア・インド・東南アジアなどの船が重要であり、鉄釘を使わない縫合船が一般的であった。これらの船を利用する中国人にとって、磁石山伝説は違和感のないお話であったと思われる。

磁石山伝説の背景には、釘を使わない縫合船の存在があったことは間違いないと思われるが、実際の海難の危険性も当然意識されていたであろう。マレー半島を越えてインドシナ半島を目指す船が難破座礁することも珍しくはなかったであろう。『南州異物志』の記述が

南シナ海のなかのどの危険地帯を指すのかは不明である。どちらかという沿岸部で座礁する場合が想定されているように見える。

中国の論者は、「漲海」「崎頭」の「磁石」地帯をパラセル・スプラトリーとみなし、この記述を中国人が最初に南シナ海の群島を発見し記録したことの証拠と考えているようである。しかし、そもそもこの記述は伝説的なものであり、現実の地理を反映していたとしても、それを特定するのは難しい。しかも、この情報自体、中国人の調査発見の記録ではなく、中国人が外国人から聞いた話を記録したと見るのが妥当であろう。話の内容も、中国人の南シナ海への関与と一切関係が無い。領土問題とは無縁のものであろう。

#### 付記

中国側の資料集は何故か明代の『正徳瓊臺志』巻9に引用された「異物志」を提示し、これを後漢の楊孚『異物志』の逸文としている[韓 1988: 23-24]。しかし、『正徳瓊臺志』には「出崖異物志云、漲海崎頭、水浅而多磁石、徼外大舟、錮以鉄葉、値之多拔」とあるだけで、楊孚『異物志』には言及が無い(『天一閣蔵明代方志選刊 60 正徳瓊臺志(廣東省) 上』上海: 上海古籍書店, 1982.)。資料集のこの箇所註に曾釗『嶺南遺書』が挙げられているが、内田吟風は、「嶺南叢書所収曾釗輯『楊孚異物志』は芸文類聚等に収録されている異物志の遺文をすべて楊孚のものとして輯録しているが後述の呉の朱応や呉の萬震の異物志等をも、諸古典はしばしば単に異物志と題して引用している例より見て、妥当でない」と記している[内田 1977: 279]。曾釗『嶺南遺書』については未検討であるが、曾釗が諸古典の引用に「異物志」とあれば、すべて楊孚『異物志』とみなすという誤りを犯し、中国側の資料集もそれを踏襲したということのようである。『正徳瓊臺志』の引用文もおそらく『南州異物志』に由来するものであろう。

*The Nautical Magazine and Nabal Chronicle for 1840: a Journal of Papers on Subjects Connected with Maritime Affairs.* London: Simpkin, Marshall, & co.

Huddart, Joseph. 1801. *The Oriental Navigator, or New directions for sailing to and from the East Indies, China, New Holland 2nd ed.* London: Robert Laurie & James Whittle.

Flecker, M. 2015. *Early Voyaging in the South China Sea: Implication on Territorial Claims.* Singapore: ISEAS.

韓振華主編. 1988. 『我国南海諸島史料匯編』北京: 東方出版社.

饒宗頤. 1982. 「《太清金液神丹經》(巻下) 與南海地理」『選堂集林: 史林』香港: 中華書局.

石澤良昭・生田滋. 1988. 『東南アジアの伝統と発展』東京: 中央公論社(世界の歴史 13).

内田吟風. 1977. 「『異物志』考: その成立と遺文」『森鹿三博士頌寿記念論文集』京都: 同朋社.

- 織田武雄監修.中務哲郎訳.1986.『プトレマイオス地理学』東京：東海大学出版会.
- 薮勇造訳注.2016.『エリュトラ海案内記 1』東京：平凡社（東洋文庫）.
- 深見純生.2022a.「海域東南アジアにおける唐代の崑崙」『カンボジアの文化復興』32.
- 深見純生.2022b.「7世紀の林邑交易圏」『カンボジアの文化復興』32.
- 家島彦一訳注.2007.『中国とインドの諸情報 2：第二の書』東京：平凡社（東洋文庫）.
- 家島彦一訳注.2011.『インドの驚異譚 1：10世紀〈海のアジア〉の説話集』東京：平凡社（東洋文庫）.
- 村川堅太郎訳注.1993.『エリュトラ海案内記』東京：中央公論新社（中公文庫）.
- 山田慶児.1966.「錬金術者のユートピア：偽葛洪の夢と幻想の地理的世界像」『日本研究』第14集（国際日本文化研究センター紀要）.